

リハビリ入院システムの構築～訪問リハビリと連携して～
○橋本 緑、 五十嵐 大二、山田 由佳

医療法人清仁会 水無瀬病院 リハビリテーション部

【はじめに】当院は一般急性期病棟、回復期病棟、地域包括ケア病棟を有する計 117 床のケアミックス型の病院である。法人内の介護事業所と連携し、在宅療養支援病院として地域住民の健康に寄与するべく病院業務にあたっているが、退院調整をして在宅に戻られた患者様が徐々に身体機能の低下をきたし、在宅生活困難となる事例も多く見られる。早い段階で医療職が介入することで、より長く住み慣れた街での生活が維持できるのではないかと考え、リハビリ入院システムを構築したので以下に報告する。

【目的】地域の患者様が 1 日でも長く在宅で生活できるよう、短期集中的なリハビリ入院を行い身体機能の向上を図ること、また入院を期に従来の生活環境や介護サービスの見直しを行うことを目的とした。

【対象】当法人の訪問リハビリを実施している利用者

【方法】身体機能の低下が見られる利用者や身体状況の変化により介護サービスの見直しが必要であると思われる利用者を訪問リハビリ担当者が選定し、病院のベッドコントロール会議にて報告。協議の結果入院の必要性ありとなれば、入院日までに訪問リハビリからリハビリ入院サマリーを、ケアマネジャーから連携シートを地域連携室宛てに送付する。入院前日に入院前カンファレンスを行い、多職種にて生活課題や入院の目的を共有できるように工夫した。また入院中に過度な安静により ADL が低下しないよう、必要に応じて福祉用具を用いてベッド周囲の環境を整備、レクリエーションや体操の機会を設けるなど活動の機会を増やすよう努めた。また運動機能評価や in body 測定を行い、客観的指標にて身体状況の把握ができるようにした。

【課題】他部門との調整に時間を要し、現在はまだ 1 例も入院には至っていない。

【今後の展望】短期集中での入院でリハビリ効果を得られれば、より長く在宅生活を継続できる。また病棟も効果的に運用でき、病床稼働率の安定化にも寄与できるものとする。